

mundi



[ムンディ]

2015 April No.19

4



特集 基礎教育

学びやで輝く

遠い日本からの贈り物

Kenya ケニア

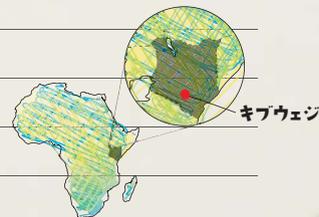


私は今、ケニアの首都ナイロビから約200キロの町キブウェジで暮らしている。青年海外協力隊として、有機農業や畑作りの普及活動を行うためだ。

ある日、地元の郵便局から郵便物を取りに来るように電話がきた。JICA事務所から、広報誌『mundi』などの資料だった。その日はそれを持って、活動先の農民グループの元へ。昼食の時に、食堂で休みつつ『mundi』を出してみると、村の子どもたちが集まってきた。みんな興味津々なようで、いつまでも写真を眺めていた。

私が活動しているのは、電気が通らず、カラー写真を目にする機会もめったにないような地域だ。子どもたちに、この広報誌のカラー写真はどう映ったのだろうか。

特集の一つは「日本の地域発の国際協力」。写真を見ながら、「ここはどこなの?」「ここへ行ってみたい!」と話す子どもたち。そのキラキラとした笑顔を見て、「私も活動を頑張ろう」と強く思った。



撮影：笹原千佳（ケニアノ青年海外協力隊）

あなたの作品募集中!

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録方式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300~350字)、記名の可否をご記入の上、写真と共に応募先アドレスまでEメールでお送りください。
*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこれら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(『mundi』編集部宛)

「mundi」はラテン語で「世界」。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

02 my photo 遠い日本からの贈り物 ケニア

04 特集 基礎教育 学びやで輝く

授業研究でより良い学びを ザンビア
算数が好きになる教科書を作りたい ホンジュラス
「読み書き」できる喜びを全ての人に パキスタン
JICAボランティアが出会った世界の子どもたち



18 PLAYERS 村の学校を救うために 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会

20 JICA Volunteer Story 新村 桂 青年海外協力隊／モザンビーク／青少年活動

22 世界とつながる教室 世界を知り、 自分と向き合う

伊那市立伊那東小学校



24 JICA STAFF 中村 真与 JICA人間開発部 基礎教育第一チーム

25 JICA UPDATE

26 Voice 谷中 修吾 ビジネスクリエイター／国際教育NGO主宰

28 ココシリ 「ここが知りたい」 いろんなトピックを分かりやすく解説!

30 地球ギャラリー ルワンダ 未来をつなぐ家族写真



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り マヤ文明のカードに思いをのせて

40 私のなんとかしなきゃ! ボビー・オロゴン タレント



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

撮影：渋谷敦志

タイの難民キャンプの中にある小学校で学ぶミャンマーのカレン族の少女



全ての人に教育が 行き渡らない

約5700万人。

学校に行きたくても行けない。世界ではこれだけの数の子どもたちが、そんな現実と直面している。国語算数理科社会……。時間割に沿って、先生が教壇に立って教える。手元には、各科目の教科書とノートがある。当然のことのように思えるが、それが限りなく困難な国がまだまだたくさんある。その犠牲になっている多くは、開発途上国で暮らす子どもたちだ。

「政府がせい弱であるために、義務教育であっても必要な予算が確保できず、教育システムの確立もうまくいっていない。また家庭が貧しく、学校に行くよりも家事やきょうだいの世話が優先されてしまっている」と、広島大学教育開発国際協力研究センターの吉田和浩センター長は話す。しかしどんな理由があろうとも、大人の事情で子どもが学ぶ権利が奪われてしまうことは、決して見逃してはならない事実だ。

全ての子どもたちに教育の機会を。国際社会がその思いを一つにし、本格的に動き出したのは今から20年以上前。1990年、タイのジョムテイエンでの国際会議がきっかけだった。ユネスコ(国

連教育科学文化機関)、ユニセフ(国連児童基金)、世界銀行、UNDP(国連開発計画)が主催し、世界各国の代表が一堂に会して開かれたのが「万人のための教育(EFA: Education for All) 世界会議」。初等教育の完全普及、教育の場での男女の就学差の是正などを目標に掲げ、先進国が途上国の教育改革を後押しし始めた。

その後も、ユネスコが動きを取りながら、世界各国で取り組みが進められてきたが、教育制度や文化・習慣の違いも大きく、その道のりは、決して容易なものではなかった。そこで2000年、セネガルのダカールであらためて議論の場が持たれ、より具体的な目標を定めた「ダカール行動枠組み(Dakar Framework for Action)」を採択。また時を同じくして「ミレニアム開発目標(MDGs)」も設定され、国際社会が一丸となって、初等教育の完全普及に取り組む機運が高まっていった。

日本の強みを生かし より良い教育を届ける

そんな努力もあって、貧しい状況にありながらも、少しずつ増えてきた学校に行ける子どもたち。しかしここで問題となってきたのが、教育の質の問題だ。先生に十



特集 基礎教育

学びやで輝く

学校に行って勉強して、休み時間に友達と遊ぶ。
日本で暮らす多くの人を送ってきたであろう子ども時代。
しかし世界を見渡すと、それは当たり前のことではない。
開発途上国の子どもたちが直面する現実とは。

編集協力：広島大学教育開発国際協力研究センター 吉田和浩センター長

西アフリカのとある国の小学生

アイシャちゃん(9才)の1日



↑
アイシャちゃん

5人きょうだいの3番目。両親、兄(12)、姉(10)、弟(6)、妹(1)。ヤギと羊が3頭ずつ。将来の夢は看護師。「妹がマラリアにかかって病院に連れて行った時、テキパキ働く白衣の看護師さんを見てすごいなあと思ったから」

分な指導力がなかったり、そもそも授業で使う言語が家で使っているものと違ったり…。子どもたちが授業についていけない、途中で学校を辞めざるを得ないことも多いのが現状だ。

「そこで今、途上国は教育の質を上げるための取り組みに力を入れています。それこそ、日本が力を発揮できる分野だと思えます」と吉田センター長。江戸時代の寺子屋に代表されるように、古くから、

一人一人の力を伸ばせるような教育を大切にしてきた日本。学校現場には、先生たちが授業研究を通じてアイデアを共有したり、教材研究をしたりするなどの「お家共が掛け算や割り算でなぜつまづいてしまうのか。日本の先生たちは、一人一人の学びの状況を見極めながら、適切な指導方法を考えます。机の配置や子どもへの発言の促し方なども、それを踏まえたものな

のです」。また、教科書作りや家庭学習などで生かされている民間企業との連携も、日本の教育改革のカギとなってきた。

そんな強みを生かして日本が続けてきた国際協力には、何よりも、現場のニーズに即した貢献が光る。学校の先生や保護者の声を聞き、課題に向き合い、その国に合う実践型のモデルをつくっていく。さらにそのモデルを地方から全国に展開し、中長期的に実施できるよ

うな制度や政策を提案していく。こういった一連の取り組みが、現地の人々が本当に必要としている教育へとつながっているのだ。

2015年はMDGsの達成期限の年。それに合わせて取り組みべき課題を整理し、新たな一歩を踏み出そうとしている教育分野。全ての子どもたちに質の高い学びへの道が開かれるよう、日本はこれまでの蓄積を生かした協力を行っていく。

イラスト：永江艶の

1時間目	フランス語
2時間目	算数
3時間目	理科
昼休み	
4時間目	体育
5時間目	フランス語

ある日の時間割。1コマは45分。



7:30
登校

学校までは徒歩15分。通学路はサバンナで、サソリなどが突然現れることも。



8:00~12:00
授業

わらぶき屋根の青空教室。机、椅子が足りず、地べたに座る子も。教科書は隣の友達と一緒に見る。ノートの代わりに、自分用の小さな黒板を使う。



12:00~15:00
昼休み

急いで家に帰る。ランチは朝食と同じもの。そして夕食の準備。うすときねでミレット(雑穀の一種)の脱穀のお手伝いをするのは女の子の仕事。一番下の妹のお世話をし、また学校へ。



5:30
起床

まだ暗い中、姉妹と一緒に井戸に水くみへ。水を入れたバケツを頭に載せて慎重に運ぶ。往復30分。



15:00~18:00
授業

暑い時間で喉が渇く。教室には水がめがあつて、その中の水は自由に飲める。水は親たちが運んできてくれる。



18:00
下校

夕食のお手伝いと妹のお世話。食後は家族で地元のニュースや世界のニュースをラジオで聞く。



21:00
就寝

電気がなく授業の復習もできないので、早く寝てしまう。



6:30
朝食

お母さんが作ってくれた「プール」というおかゆを食べる。



from ザンビア
Zambia



リビングストーン

授業研究で より良い学びを

この数年、アフリカ南部のザンビアで、学校の先生たちが力を入れていることがある。全ての子どもたちに、より良い教育を届けたい。その一心で取り入れられているのが、日本でもなじみの授業研究だ。

写真：渋谷敦志（フォトジャーナリスト）



ブルング小中学校は、1クラス40人以上が学ぶマンモス校だ

難しい理数科の授業を ひと工夫したい

「好きな科目は何？」
「英語!」「理科!」「算数!」
真つ青な空の下、校庭に響く子どもたちの声。休み時間、教室から飛び出してきたどの子も元気いっぴい。3月初旬、ザンビアの首都ルサカから車で約2時間の町、ムンバにあるブルング小中学校を訪れた。

「カーン、カーン、カーン」。この学校では、校庭にあるドラムをたたく音が授業開始の合図。ある教室では、中3の理科の授業が始まっていた。理科を教えるのは、ンジエクワ・ムンディア先生。黒板にチョークを走らせ、今日のトピックを書く。「DENSITY」。

この時間は、「密度」について学ぶようだ。

「では、前に実験器具を取りに来てください」。6つに分かれたグループの代表が、水の入ったメスシリンダー、小石、ひも、量りを持っていく。「メスシリンダーの中に石を沈めて、どれくらい水量が上がるか、目盛りを見て記録してください」。ムンディア先生の指示に、顔を見合わせながら、ヒソヒソ声で相談する生徒たち。思春期ならではのシャイさは、日本の中学生と変わらない。

この日の授業は、いつもと少し違った。教室の後ろや横に、他のクラスの先生がずらりと並んでいるのだ。どうやら保護者ではないようだが、「授業研究なんですよ」。先生の一人が、そう教えてくれた。この日のために、みんなで練り上げた授業案が効果的に進むか、ムンディア先生の授業で試しているのだ。

「今日の授業の振り返りをしましょう」

授業が終わり、生徒たちが給食を食べている間に、先生たちが机を寄せて会議が始まった。これから授業研究の本番だ。「実験を取り入れたのは、分かりやすかった」「でも本当に、密度の概念を理解できた子は少ないのではないか」「答えを出す前に、生徒たちにもう少し考えさせる時間があつ

ても良かった」。手元の評価表を基に、さまざまな意見が飛び交う。校長のジョブ・ムブワ先生も参加し、「子どもたちが教室で学んだことを、教室の外でいかに生かすことができるか。それができなければ意味がない」と熱く訴えていた。

先生による 先生のための授業研究

「アフリカの中でも、ザンビアは授業研究が制度として導入されている数少ない国の一つなんですよ」。そう教えてくれたのは、10年以上、この国の教育改革を緑の下で支えてきた中井一芳専門家。静岡県の公立中学で教員をしていた中井専門家が、国際協力の世界

に飛び込んだのは22年前。青年海外協力隊としてソロモン諸島で理科を教え、その後も、ケニアやフィリピンで理数科教育の質の向上に奔走してきた。そんな中井専門家がザンビアで挑戦してきたのは、かつて自分も日本で取り組んだ「授業研究」だった。

学校に行ける子どもの数は9割を超えたザンビアだが、授業に付

密度について学ぶ生徒たちとムンディア先生。小石の重さと体積を調べ、それを割った数が密度。その説明を受けて、計算練習が始まった



授業の後は先生たちが集まって話し合い、良かった点、改善すべき点を挙げ、次の授業に生かしていく



ザンビアの小学校で学ぶ少年。学ぶ環境がどうであれ、子どもたちは生き生きと机に向かっている



リビングストーンで行われた教育関係者の会議。約1週間にわたり、さまざまなトピックで質の良い教育を目指して活発な議論が交わされた



教室が足りない学校は、授業が午前と午後の二部制。しかし時間がもったいないからと、空き時間には外で授業も行われていた

ルサカから飛行機で約1時間、国内線で移動していると、眼下に壮大な風景が広がった。世界三大瀑布の一つ、ザンビア屈指の観光

みんなで考え、情報を共有する場
期待をしまし。今日は私たちがだけで行く。授業研究のノウハウはきちんと把握しているので大丈夫だ」と、バンダ所長が力強く答えてくれた。この言葉を聞いた時、中井専門家は「授業研究が制度としてきちんと根付けば、この国の教育は大きな可能性が開ける」と考え、黒子に徹して普及に取り組みんできた。

スポットとして知られるビクトリアの滝だ。
その玄関口、リビングストンの市街地を抜け、州の施設内の会議室に集まっていたのは、ザンビア各州の教育関係者たち。年4回、授業研究を含む取り組みについて共有し、課題解決の道筋を開くために一堂に会しているのだ。「このように、みんなで意見を共有する場は貴重です。教育は子どもたちのためにあるべき。そのためには、私たちは切磋琢磨して改善に

努めなければなりません」と、エスパー・チザンベ教育部長は力強く話してくれた。
翌日、近隣のリンダ・ウェスト小中学校に行くと、子どもたちが元気な声と踊りで出迎えてくれた。数学の授業を見学させてもらうと、その時間はルートの計算方法の勉強。黒板に書かれた問題をノートに書き写し、回答したものをメキウエ・ムトンボ先生がチェックしていく。この日も後ろには、他のクラスの先生たちの姿があっ

た。「生徒を前に出させて、黒板に回答を書かせたのは良かった」「計算の時間が足りなかったのでもう少し問題の量を少なくしては」。授業後も先生たちの熱い議論は続いた。「今まで教員同士が情報共有する場がなく、一人で悩んでいることも多かった。みんなのアイデアが集まればより良い授業ができます」。先生たちは、その声をそらえて話してくれた。
こうしてザンビア全土に広まった授業研究は、さらなる定着を目指し、先生の卵が学ぶ教員養成校にも取り入れていく予定。「日本が協力したからでなく、ザンビアの人たち自身が授業研究を自分たちに必要なものとして取り入れてきたのが成功のカギ。熱意を持って取り組む先生たちは、この国の教育の財産です」と中井専門家は話してくれた。
子どもたちの純粋な「学びたい」という思いと、それを全面から応援したいと奔走する先生たち。それを影でしっかりと支える日本人専門家たち。ザンビアの教育現場は、これからの10年で、さらに大きく変化を遂げていくはずだ。

リンダ・ウェスト小中学校で、授業後の検討会に参加する濱良枝専門家。ザンビア教育省で、授業研究を含む教育政策全般のアドバイザーを務めている



[上]授業中に先生が子どもたちを見て回る「机間巡視」も、効果的な授業の手法として取り入れられている
[下]中井専門家はザンビア歴約10年。日本での教員経験もあり、頼もしい存在だ

さらにJICAの長期研修員として広島大学の大学院で修士号を取る中で、日本の先生方の教育に対する情熱に感銘を受けました。授業研究を通じて、この熱をザンビアにも広めたい。その一心でここまで来ました」。そうバンダ所長は話す。
その決意を中井専門家が目の当たりにしたのが、ある日、授業研究を実践している学校にモニタリングに行く時のこと。中井専門家たちも同行しようとする中、「日本人が来ると、先生たちが過剰な

いていけず、落第してしまう子が多い。その要因の一つが、指導力不足。先生に研修を行うにも、遠隔地に分散している学校から1カ所に集める予算がない。それなら校内で、先生同士が学び合う場をつくらなければならない。それにピッタリなのが、日本の先生たちが力を入れてきた授業研究だった。しかし、「最初は考え方を変えてもらうことに苦労しました」と中井専門家。研修といえば教育省が企画し、参加すれば日当が支給されるのが当たり前。そんな環境に慣れてきた先生たちに、自分たちが主役となってアイデアを出し合い、お金がなくても自分の学校で研修が行えることを理解してもらおうのは「並大抵の苦労で

は済まない」と覚悟していた。しかしその不安を吹き飛ばすかのように、学校現場には、授業研究に意義を見いだす先生が何人もいた。その一人が、理科の授業で教本を執ってきたベンソン・バンダさん。そこで現在、バンダさんが所長を務めるルサカの国立科学センターを訪ねてみることに。教育省が所管するこのセンターは、理科教員の研修や教材開発を行う組織だ。
「見ていただきたいものがあるので、こちらへどうぞ」。案内された部屋のドアを開けると「ガガガッ、ガガガッ」と、工事現場の

ような音が部屋中に響いた。何人もの作業員が、ノコギリで木を切ったり、大きな鉄板をつなぎ合わせたりしている。「授業研究を重ねる中で、やはり最低限必要な実験器具がないと実践的な授業は難しいと。でも教室の数も足りない中で、理科室を設置するのは非現実的。そこで、シニア海外ボランティアの方と開発したのが、モバイル実験キットです」。可動式の棚の中に、ピーカーやアルコールランプ、電気の配線や試験管立てなど、理科の実験ができる基礎的な道具が入っているもの。まさに「動く理科室」のよう。現場の先生にも評判が良く、全国の学校に配布され活用されている。
「中井さんと一緒に仕事をし、



センターの技術者と共に実験キットを調整するバンダ所長



ニカラグアで行われたワークショップ。その国の制度や文化に合わせた内容を教科書に取り入れるようにした



中米5カ国で教科書作りに携わったメンバー。西方専門員は、リーダーを務めた

西方専門員は、「ホンジュラスでも引き続き教材を有効活用するための教員研修などが続いているので、昼間にその仕事を終えて飛行機でエルサルバドルに行き、翌日までにホテルで資料をチェックして……ということ

もありました」とハーダナ日々を振り返る。「一番変わったのは、先生たちのモチベーションが上がったことです。現在、教育省の政策アドバイザーを務める中原篤史専門員も、新しい教科書の効果を実感している。実際、小学校の卒業率も年々上がり、目に見える形でも効果が現れているからだ。教材開発の重要性を認識した教育省は、スペイン語や理科の教材を自ら作成するなど、確実に変化が生まれている。

さらに、小学校の教員養成校では、日本の協力で作成した指導書の習得を卒業要件に取り入れたことで、本当に指導力のある教員を育てていく環境が整った。しかしその一方で、まだまだ課題も盛りだくさんだ。「優秀な先生が就職できずに失業者として国内に留まっている。採用計画の策定など政策レベルでも改善が必要。根気強く支援を続けていきたいと思っています」と、中原専門員は力を込める。

中米地域以外の国からも、関心が寄せられている日本の教材開発のノウハウ。子どもたちの豊かな学びのために、まだまだ多くの可能性を秘めているそうだ。

ホンジュラスのマルロン・エスコト教育大臣と青年海外協力隊。学校で算数の授業をサポートし、教科書を根付かせるための活動を続けている



ジュラスをはじめさまざまな国で活動してきた。留年、さらには中退に追い込まれてしまう。そんな子どもたちを前に、政府は今から10年以上前、ある決断をした。算数の教科書を一新しようというのだ。それまでの教科書は説明文ばかりで、児童の学ぶ意欲が薄れてしまつてると感じたからだ。また、新しい教科書に合わせて指導書も作り変え、先生の指導力を向上させようという狙いもあった。

に、さまざまな工夫を凝らして教材を作る技術が優れているのです」と、西方専門員は日本の強みを説明する。日本人専門家と、ホンジュラスの教育省や教育大学の職員らが共同で作業を進め、現地側が苦手とする分野については研修を行うなどして知識を蓄えた。説明文に沿って図表を加えるなど、日本の教科書の表現法などを伝えるうちに、現地のメンバーにも「分かりやすい教材」を作るという意識が生まれてきた。その一人が、教育大学で働くルイス・ソトさん。「今までの教科書の問題点をしっかりと見直そう」と、創造的なアイデアを次々と出してくれるようになった。

世界で関心が広がる 教材開発のノウハウ

あつという間に2年がたち、ついに新しい教科書と指導書が完成した。子どもにも先生にも使いやすい点が評価され、国が指定する教材としても承認。全国の小学校に配布されるようになった。同じくスペイン語を公用語とする他の中米地域からも注目を集め、エルサルバドル、ニカラグア、グアテマラ、ドミニカ共和国でも、日本と連携して、新しい教科書作りが始まった。

ホンジュラスのマルロン・エスコト教育大臣と青年海外協力隊。学校で算数の授業をサポートし、教科書を根付かせるための活動を続けている

「この立体的な展開図を考えてみましょう」
2時間目、算数の授業が始まった。先生が手にしているのは、紙で作った立方体。「実物があるとイメージしやすいよね」。5年生

の子どもたちにも好評だ。ここはホンジュラスの首都テグシガルバにある小学校。算数の授業には、いつも楽しく学べる工夫がたくさん詰まっている。2010年、現地の教育省が好きな教科を調査すると、ほぼ半数が答えたのが「算数」ところがその3年前、その割合は3割にも満たなかった。

「ホンジュラスでは、小学校でも進級テストの成績が悪いと、留年になってしまいます。主に足を引く張っているのが、算数とスペイン語です」。こう説明するのは、西方憲広 JICA 国際協力専門員。10年近く日本の小学校で教えていたが、開発途上国の教育支援に携わりたいと退職を決意。ホン

その国に適した 質の高い教材を



ホンジュラス北部の街テラにある教員養成校でも、日本の協力で作られた指導書を活用。特に教育実習の時には手放せないアイテムだ

算数が好きになる 教科書を作りた

カリブ海に面した中米の国ホンジュラス。小学校では子どもたちの元気な声が響くが、6年間で卒業できるのはなんと約3割。こうした状況を打開するために生かされているのが、日本の教科書作りのノウハウだ。



ホンジュラスの小学校の教科書(1年生)では、お金の数え方や計算問題が充実。登場するマスコットキャラクターは、ジェンダーに配慮して、人間ではなくオリジナルのイラストが使われている



テグシガルバ

from
ホンジュラス
Honduras



オカラ県にあるノンフォーマル小学校の授業をサポートする大橋専門家(左)

地域で教育支援に取り組んできた大橋知穂専門家。そこでパンジャブ州の識字局は10年以上にわたる「ノンフォーマル小学校」、学ぶ機会を逃した15〜35歳への「識字教室」を通じて、識字率の向上を目指してきた。

現地の人たちの努力もあり、少しずつ広がりを見せてきたノンフォーマル教育。しかし、教職の資格がなく、教えるノウハウが十分でない先生も多く、教育の質に関しては改善すべき点が多く、日本と共に。そこでこの約10年、日本と共に

「従来の教科書は、文字の説明ばかり。分りやすく、実用性を持たせるため、日本の教材を見てもらいながらイメージを持ってもらえるように努めました。」すると、最初は識字局からの指示をただ待つだけだった現場の担当官たちも、保健衛生局や農業局など他の部署にも声を掛け、生活に役立つ知識が学べる授業づくりに取り組み始めた。

に、教材作成や識字局職員への研修などの取り組みが進められてきた。大橋専門家が何よりも心掛けてきたこと。それは「現場主導」だ。現地の人たちに当事者意識がなければ、何をしてもうまくいかない。そこで教材作りでは、学習項目などを決める初期段階から、現地の視点で考えられる人を巻き込むことにした。「なかなか適任者が見つからず苦労しました。新しい取り組みに対する抵抗がある人も多かったようです。」

「今年に入って、日本の協力で作られたノンフォーマル教育のカリキュラムが、パンジャブ州で正式に承認された。確実に根付きつつ

学びの機会を得たことで、子どもたち自身ができることも増えてきた。「自分の子が電気料金の請求書が読めるようになったと、うれしそうに近所の人に自慢していた親御さんもいました。また、年上の人に対する態度が良くなったり、健康や衛生に気を付けるようになったことも大きな変化です。」と大橋専門家は話す。「医者になりたい」「先生になりたい」など将来の夢も広がり、未来を見つめる表情は生き生きとしている。

「そうしているうちに、学ぶ側にも変化が生まれてきた。その舞台の一つが、社会的に疎外された貧しい人たちが働くレンガ工場。これまで工場の手伝いのため学校に行けなかった子どもたちが、午前中は工場のそばにあるノンフォーマル小学校で学び、午後から手伝いをするという生活が変わってきた。家の事情に合わせて通学時間は調整でき、労働時間が削られることを心配していた親も読み書きを学ぶ大切さに理解を示してくれるようになった。」

ある新しい教育の形は、これから全国展開される計画だ。「まずは校舎などのインフラを整備するところから、現地政府に働き掛けていく必要があります」と、JICA Aパキスタン事務所の稲垣良隆さん。小学校を卒業しても中学校が近くにないなど、上の教育過程に進むことが難しい現実があることも課題。さらに、将来のために学校での学びが就職へとつながる仕組みづくりも求められている。「誰もが自分自身で道を切り開いていく力を育める国となるように、さらに取り組みを進めていきたい」と稲垣さんは語る。



[上]成人向けの教室では、裁縫や家庭菜園など収入につながる技術も教えている
[下]パンジャブ州で多くの人が働くレンガ工場。低賃金で過酷な労働だが、学ぶ機会を得たことでみんな生き生きとしてきた

読み書きが学べる もう一つの教育

パキスタンで最大の人口を抱えるパンジャブ州。今ここで、女性を中心に話題となっているものがある。手帳に自分の名前や誕生日、家族のことなどを書きためていく「My Book」だ。書いて、記録することは楽しい。それを多くの人が知ったのは、つい最近のことだ。

全ての子どもに教育を。2014年、史上最年少でノーベル平和賞を受賞した17歳の少女、マララ・ユスフザイさんのメッセージは、世界中の人々の心を揺さぶった。パキスタンは、学校に行けない子どもが、アフリカのナイジェリアに次いで世界で2番目。読み書きができない人はなんと約5割。マララさんはそんな状況の中でも、女の子でも学ぶ権利はあ

るべきだと、学校に通い続けたのだ。「貧しくて学費が払えず、女子教育への理解も乏しい環境の中で、全ての人が学校に行けるようになるにはまだまだ時間がかかります。だったら、学校と同じ程度の資格が得られ、生活に必要な読み書きを学べる場、つまり、ノンフォーマル教育」を充実させていこうという動きが高まってきたのです。こう語るの、長年この



読み書きを学ぶ子どもたち。ノンフォーマル教育を受ける7割以上が女性といわれている

「読み書き」できる喜びを全ての人に

学校に行く機会を奪われ、生活に必要な読み書きができない。そんな人が、パキスタンにはたくさんいる。そこで約10年前から、学びの機会がない人たちへの支援を続けている日本。その成果が少しずつ実を結び始めている。



教材として使われている「My Book」。日記のような感覚で、楽しみながら書くことを学べる

オトゥゴンバヤル・トゥヴウシンバヤル (5歳) くん

好きなこと: 飛行機のラジコンで遊ぶこと
 願い事をするなら?: スタッドレスタイヤ付きの大きな車がほしい
 将来の夢: 大きい会社の会社員

僕 は、幼稚園で友達や先生とおしゃべりするのが大好きです。麻生先生と初めて会った時もうれしくて、家族のこととかいろいろ話をしました。

そして、負けず嫌いです。ある日、みんなでゲームをして負けてしまい、悔しくて、誰とも話したくなくて、給食の時間になっても教室の隅にいました。いつもみたいに担任の先生にたたいて怒られるかなと少しドキドキしたけど、怒らずに遠くで見守ってくれました。麻生先生が担任の先生に、僕の気持ちを話してくれたみたいです。少し時間がたって気持ちが落ち着いたので、席に戻って給食を食べました。

次の日、別のゲームをする時に先生から「今日は負けても泣いたらだめだよ」と言われたので、「今日は泣かないんだ!」と答えました。前よりゲームに楽しく参加できるようになった気がします。負けても「次はもっと頑張ろう」と思って挑戦しています。



優しい性格のトゥヴウシンバヤルくん(左)は、友達と遊ぶのが大好き



麻生祐太郎さん
 (青年海外協力隊/幼児教育) が
モンゴルで出会った!



丸山ちさとさん
 (青年海外協力隊/青少年活動) が
ガーナで出会った!

アクウィア・ダズィ・ルイス (11歳) くん

好きなこと: 友達と遊ぶこと、勉強、パソコン 写真
 願い事をするなら?: パソコンを使うので停電がなくなってほしい
 将来の夢: 軍隊に入って、国を守りたい

僕 は、ろう学校に通っている小学3年生です。学校で1番好きな時間、それは放課後です。パソコン教室を使えるので、3年生の番が来るのを毎週楽しみにしています。最初はマウスうまく握れなかったけど、だんだん上手に使えるようになりました。今では、タイピングソフトや学習ゲームを上級生よりも使いこなせるようになって、自分に自信を持てるようになりました。

丸山先生ともパソコン教室で知り合いました。先生はいつも子どもたちの学年をチェックしたり、使い方を教えてくれたりするので、僕は自分の番じゃない日にも教室に行き、お手伝いをしています。最近、少しずつ分からないことや知りたいことをパソコンで調べられるようになったけど、検索する時の言葉の選び方のコツがまだつかめないので先生に教えてもらっています。もっと技術を身に付けて、世界中の国の情報を知っている大人になりたいです。



給食で好物の「ワチエ」を食べるルイスくん(右から2人目)

特集 基礎教育
 学びやで輝く

JICA ボランティアが出会った

世界の子どもたち

国の将来を担う子どもたち。世界各地で活動するJICAボランティアとの出会いを通じて、どのように成長したのか聞いてみた。

アリサ・ケニ (14歳) さん

好きなこと: サモアで人気のスポーツ「ネットボール」
 願い事をするなら?: オーストラリアに住みたい
 将来の夢: 科学者

私 は、サモアのサバイ島の小学校に通っています。今年は最上級生なので、低学年のお世話も頑張っています。両親が首都に行くために島を離れる時は、代わりに家事をしたり、兄弟の面倒を見たりしています。

優美先生とは2年前に初めて会いました。先生が引っ越して来る日、朝からそわそわして、バスを降りる姿が見えるとうれしくて思わず走って駆け寄りました。すぐに仲良くなって、宿題を教えられたり、「2人だけの秘密ね」と言って悩みを相談したりしています。

先生は授業で「なぜそうなるの?なぜそう思うの?」とよく聞きます。これまで全部暗記していたので、びっくりしました。最初は上手に説明できなかったけど、新しいことを知るたびに「なぜだろう」と考えるようにしたら、だんだん自分の言葉で言えるようになりました。将来の夢に向かって、これからもいろいろなことを勉強したいです。



ネットボールが大好きなアリサさん(右)。この日は他のチームと試合をした



高井優美さん
 (青年海外協力隊/小学校教育) が
サモアで出会った!



立塚秀知さん
 (日系社会青年ボランティア/野球) が
アルゼンチンで出会った!

レアンドロ・山脇 (11歳) くん

好きなこと: 野球
 願い事をするなら?: 億万長者になる
 将来の夢: アメリカ大リーグの選手になる

僕 は、ブエノスアイレス州にあるラプラタ日本人会の少年野球チームに所属しています。一番思い出に残っている試合は、昨年の市の大会の決勝戦です。最終回、相手に3点差で負けている中、僕に打順が回ってきたのです。「絶対に優勝したい!」。そう思って必死にボールに食らいつき、8球目でヒットを打つことができました。そこから打線がつながり、結果は逆転優勝。立塚コーチも一緒になって喜んでくれました。

コーチは野球の技術だけでなく、精神面や礼儀についても教えてくれます。今まで「自分が楽しければいい」と思っていたけれど、周りを気遣ったり、低学年の面倒を見たりできるようになりました。あと、みんなグローブやバットを大切に扱うようになりました。僕は今年キャプテンになりました。7月には東京で開かれる世界少年野球大会に出場する予定です。チームを引っ張り、最後まで諦めずに戦います。



バッティングの練習に励むレアンドロくんは4番バッターだ



現地の子どもたちと交流するラオス事務所長の加瀬さん。「住んでいる場所や環境に左右されることなく、将来や希望を選択できる社会になってほしい」

PLAYERS

国際協力の担い手たち

公益社団法人 シャンティ国際ボランティア会 村の学校を救うために

近年、都市部を中心に経済成長が目覚ましいラオス。しかし地方の生活は貧しく、子どもたちの教育にも影響が及んでいる。村の学校の厳しい環境を改善するため、先生と行政官が立ち上がった。



ルアンパバーン県ヴィエンカム郡の学校。片道2時間ほどの道のりを歩いて通う子どもたちもいる

無い無い尽くしの複式学級

薄暗い教室で、一冊の教科書を奪い合うように囲む子どもたち。2人掛けの椅子に4、5人がひしめき合って座り、中

には授業に興味を持たず、ふらふらと外へ出て行ってしまいうも。先生の姿は見当たらない。

「先生、教材、教室など、全てにおいて無い無い尽くしの状態でした」
今から2年前、ラオス北部、ルアンパ

いといわれるヴィエンカム郡。それ故に、子どもたちの教育も厳しい環境にある。雨期になると浸水してびしょびしょになってしまう校舎、乾期でも大きな川を渡らないとたどり着けないような学校。農作業をする両親の手伝いやきょうだいの世話などに追われ、卒業せずに辞めてしまいうも少なくない。

生がいくつもの学年を掛け持ちで担当する「複式学級」だ。一コマの中で、3つの学年を渡り歩く…。そんなことも珍しくない。

教育環境の改善に向けて立場を超えた協力を

そして、学校に通えなくなるもう一つの理由。それは、この地域ならではの「言語」の問題だ。人口の8割以上が少数民族のこの地域には、民族の数だけ言語がある。しかし、学校で使われるのは公用語のラオス語。授業や教科書の内容をなかなか理解できない。

先生の数が不足しているため、今すぐ複式学級を完全になくすことは難しい。そこでJICA草の根技術協力事業を通じて力を入れているのが、複式学級の運営能力を高める研修だ。「指導に集中できず、授業が煩雑になってしまふ」「先生不在でも子どもが意欲的に自主学習



「現場で苦悩する先生たちに役立つ研修をしたい」と、トレーナー研修に励む郡の行政官たち



研修用に作成したガイドブック



郡教育局の職員と加瀬さん(左から4人目)。ヴィエンカム郡出身の行政官と先生たちは、同じ目標に向かって進んでいる



研修参加者の中には、子どもを抱えた母親や1週間分の大量物を背負って来る先生もいる

バーン県ヴィエンカム郡の小学校を訪れた公益社団法人シャンティ国際ボランティア会(以下シャンティ)の加瀬貴ラオス事務所長は、村の子どもたちの教育環境にショックを受けた。



ルアンパバーン県ヴィエンカム郡の学校。片道2時間ほどの道のりを歩いて通う子どもたちもいる

をできないか」。そんな現場の声に伝えるために、模擬授業やグループワークなどをふんだんに取り入れた学びの場を設けることに。対象は、郡内の約240人の先生、中央の教育スポーツ省、県や郡の教育局の職員などだ。

しかし、「すぐに壁にぶち当たりました」と加瀬さん。現場に根差した研修にしようとして、事前に先生たちの悩みを聞きこうとしたが、集まった全員が黙り込んでしまった。自分たちを評価する立場にある中央や県、郡の職員を前に、本音を発言することに抵抗があったのだ。そこで加瀬さんらは、食事会を開くなどして両者の関係を深める場をつくり、先生の苦悩や子どもたちへの思い、目指すべき教育の在り方とことごとく話し合った。そうするうちに、「研修で学んだ知識や技能を、実際の授業で継続的に活用できるように、私たちも全力でサポートしたい」。そんな声が、行政官から聞こえるようになった。

そこで加瀬さんたちは、さらに「複式学級運営トレーナー養成」講座を企画。指導案作成のセッションでは、先生と行政官が顔を突き合わせながら、「授業の流れを学年に合わせて修正しよう」、「自習時間でも集中できる質問を設けよう」など、たくさんの改善案が飛び交い、実際の授業で生かされる仕組みができていく。

最終的な目標は、少数民族の子どもたちも楽しく学べる環境づくり。ラオス語に慣れ親しんでもらおうと、加瀬さんらは、食べ物や小物などの絵を添えた単語カード、民族に伝わる昔話の絵本などの補助教材を作り、その活用方法なども先生たちに伝えている。

「少数民族の子どもたちも学び続けてほしい」。その思いを一つにした先生と行政官。子どもたちのより良い教育につながるよう、シャンティのスタッフはこれからも現場に寄り添いながら走り続けていく。

「青年海外協力隊」

新村 桂

NIIMURA Katsura

悩み、考え、動いた先に
見つけた自身の役割

インド洋に面した美しい海岸線、アフリカや中東、ポルトガルの文化が融合した美しい街並み。アフリカ大陸南東部に位置するモザンビークは、近年、新たな観光地として注目を集めている。

「この島で私にできることなんてあるんだろうか。」
青年海外協力隊として初めてモザンビークへ渡った新村桂さんは、そんな思いを抱いていた。活動地は、

JICA Volunteer Story

PROFILE

1988年神奈川県出身。大学卒業後、人材サービス会社に就職。2013年9月から青年海外協力隊(青少年活動)としてモザンビークで活動中。



「子どもたちの可能性を広げたい」と、日本語や折り紙なども取り入れて授業を工夫している新村さん

「子どもたちが楽しみながら学べる環境を」

モザンビークの世界遺産、モザンビーク島で、教育環境の改善を目指して奮闘する新村桂さん。
学ぶ楽しさを知った子どもたちの変化が、島の先生たちの意欲も引き出している。



1991年にユネスコの世界遺産に登録されたモザンビーク島。海の恵みの恩恵を受けながら暮らす人々の生活は、何不自由ないように見えたからだ。

しかし75年の独立以降、長年にわたって続いた内戦の爪痕は、この国の未来に影を落としていた。特に、内戦の影響で教育を受けていない人々の状況は深刻で、貧困や格差の要因にもなっているのだ。

高校生の時、母親の勧めでベトナムの児童養護施設でボランティア活動を経験した新村さん。恵まれない環境の中で懸命に学ぼうとする少女に出会い、「世界の子どもの役に立ちたい」と思うようになった。大学卒業後は人材サービス会社に就職したが、「もう一度、国際協力の現場に行きたい」と、協力隊への参加を決めた。

「子どもたちを元気にする活動がしたい」。そう張り切っていたが、配属先のNGOにJICAボランティアの役割が十分伝わっておらず、悶々とした日々を過ごしていた。「どんな思いで日本から来たか、何かできることはないか、話し合ってみよう」と、NGOスタッフに思い切って相談することに。そこで初めて、島には授業に付いていけず、自信をなくしている子がたくさんいることを知った。彼らの学ぶ意欲を高め、学力向上につなげる取り組みこそ、私がすべきことだ。新村さんは地元の小学校を巡回し、子どもたちのサポート役を務めることになった。

子どもたちの理解を助けるアイデアを

以降、島内の4つの小学校、2つの学童施設で絵画や工作を教えるなど、忙しく過ごす新村さん。そんな中で、この国の教育の課題がさらに見えてきた。モザンビークでは、小学校の授業でポルトガル語が



a.巡回先の学校では、歌や運動を取り入れた授業案を先生たちに提案することも
b.子どもたちの成長と一緒に支えてきたアメリカ先生。授業が終わった後、先生の自宅で意見交換を繰り返した
c.カラフルなイラスト付きのアルファベットカード。現地の先生との共同制作だ
d.学童施設の美術の時間では、ペットボトルのふたや紙バック、トイレトペーパーの芯など身近な材料を使ってものづくりの楽しさを伝えている

使われる。しかし、モザンビーク島では就学前は現地語のマクワ語しか話せない子がほとんどで、高学年になっても基本的な読み書きができなかったり、学校に通えなくなってしまうたりしているのだ。

「ポルトガル語が分かるようになれば、学校が楽しくなるんじゃないか」。新村さんは、ポルトガル語に触れる機会を増やそうと、イラスト付きのアルファベットカードを作ったり、歌や手遊び、絵本など楽しみながら学べる手法を授業に取り入れることに。それぞれの学校の先生とペアを組んで、授業の計画や実施、振り返りなど全てのプロセスを共有していた。

そうすると、いつも授業に遅れがちで、席についても集中力のなかった子どもにも変化が起きてきた。少しずつ授業中に笑顔が見られるようになり、算数の覚え歌を大きな声で歌うようになったのだ。また、「先生、もっと問題出して！もっと解きたい！」とノートを持ってくる子も増えた。

「カッラのアイデアが子どもたちの背中を押してくれた」。「絵本は特に好評ね。また新しい本を探してみよう」。巡回先でペアを組んだ学校の先生からの言葉が、何よりもやりがいにつながっている。その一人、アメリカ・ジルムーラ先生は、新村さんの提案を積極的に取り入れ、放課後も生徒の家庭訪問や、自宅学習を助ける宿題プリントの準備など、昼夜を問わず、一緒に授業を盛り上げてきた。2人で夢中のできることを探し続けてきたことで、子どもたちの成績アップにつながったのだ。

「楽しみながら学べる環境をつくることで、子どもたちの興味の幅を広げ、彼らの可能性を膨らませたい」。新村さんは、そんな使命感を持って、今日も島の学校を巡回している。

世界を知り、 自分と向き合う

長野県伊那市に、国際協力に熱心に取り組む小学生がいる。彼ら突き動かすのは、「開発途上国の現状を何とかしたい」と願う純粋な心だ。



病気で命を落としてしまう世界の子どもたちの現状について発表

世界の問題に触れる 喫茶店

「何を飲みますか？ あったかいのありますよ」
2月下旬、真っ白な雪をかぶった日本アルプス山脈の麓。長野県伊那市立伊那東小学校では、この日ちよっと変わった授業参観が行われた。教室に入ってくる父母たちをエプロン姿で出迎えたのは、5年菊組の30人だ。
コーヒー、ココア、紅茶など6種類のメニューから好きな飲み物を選んでもらい、準備しておいた手作りクッキーと一緒に手渡す。「セットで100円です！」。そう言って手を差し出すはつらつとした笑顔に、思わず心がなごむ。
そんな思いがけないおもてなしに盛り上がる教室で、5人が教壇に上がった。「聞いてください。世界にはHIV/エイズで亡くなる子どもがたくさんいます。今日の売り上げは、彼らを支援する団体に寄附します。」



喫茶で出す飲み物は、太陽光も活用して温めたお湯を使用していた



街頭で募金活動も実施。積極的に応援してくれる大人たちも増えてきた

わら半紙にびっしりと書かれた数字や写真を指しながら、貧困や病気など世界の深刻な問題を訴える子どもたち。総合的な学習の時間に調べた開発途上国の現状に衝撃を受け、「何か助けになることがしたい」と考え出したのが、この「菊組喫茶」だった。その熱意が伝わったのか、飲み物代だけでなく、お札を取り出して寄附する保護者もいた。

そうしてこの日、集まった金額は7400円。飲み物係を担当していた大住優斗くんは、「準備は大変だったけど、病気で苦しむ子の役に立てたらうれしい」とはにかみながら話してくれた。
実は5年菊組にとって、これは国際協力活動のほんの一部。4年生の時から世界の問題について調べ始め、街頭での募金活動に加え、衣類を集めて途上国に送ったり、空き缶を集めてリサイクルするなど、地域の人々を巻き込みながら自分たちができることを考え、行動してきた。

教室での学びから 貧困問題を考える

そんな彼らの熱意を影で支え、見守ってきたのが、担任の原都雄先生だ。30年以上教壇に立ってきた原先生が、途上国の課題と日本の教育を結び付けて考えるようになったのは、今から15年ほど前だという。

毎朝行っていた1分間スピーチで、当時盛んに報道されていた中国の反日デモについて取り上げた子がいた。すると、その話に刺激を受けた子が、日本がかつて経験した戦争について調べて発表し、さらに次に発表する子も、戦火の中で生

「菊組喫茶」に訪れた母親たちに注文を取る子どもたち



きる同世代の子どもたちについて話した。そう、自然に教室に、共感の輪が生まれ、子どもたちの関心は世界の貧困に向いていったのだ。

「世界の子どもたちが置かれた現状の過酷さは、大きな驚きとなり、深く考え、話し合い、行動するエネルギーに発展していききました。ゲームやテレビなど単純に楽しくて面白いものに引っ張られがちな子どもたちが、大事なものの存在に気づき、変わっていったのです」と振り返る原先生。その成長を目の当たりにしたことが、国際理解教育を積極的に取り入れるきっかけとなった。

しかし、これまでの教えるの中には「自分に途上国のことなんか関係ない」と言う子もいた。原先生自身も「日本の不自由な生活の中で貧困について教えても自己満足に過ぎないのではないか」と思い悩むこともあるという。しかし、世界の問題と向き合う時間を生み出すことで、新しい価値観に揺さぶられ、「今できること」を探し始める子どもたちがいること

は揺るぎない事実だ。

原先生のアイデアから生まれたストリートチルドレン体験も、子どもたちが変わる。きっかけとなってきた。路上で暮らす子どもたちの気持ちを知りたいという声を受けて、原先生が長年にわたり企画してきたのが、学校敷地内での1泊2日の野宿。住む家も食べ物も十分でない路上生活を疑似体験し、「帰る家がないってすごくつらい」「布団で眠る幸せがよく分かった」と口々に話す子どもたち。途上国の現状に思いをはせながら、自分の生活についてあらためて見直すきっかけになっている。

物質的に豊かになればなるほど、遠い世界のどこかで起こっていることを、自分ごととして考えるのが難しい時代。そんな中、「子どもたちの一番良い部分を引き出しながら、世界の問題について一緒に考えたい」という原先生。「何とかしたい」と本気で動き出す子どもたちの活動は、他者を知り、自分と真正面から向き合う勇気を生み出している。



ストリートチルドレンの気持ちを体感するため、学校の屋外で一夜を明かした



JICA駒ヶ根訓練所で教えるコンゴ出身の語学講師とも交流を続けている

自立を支えていけるような仕組みを作りたい



JICA人間開発部
基礎教育第一チーム

中村 真与
NAKAMURA Mayo

大学在学中、休学してイギリスのNGOで活動。大学院修了後、2011年にJICAに就職。青年海外協力隊事務局を経て、2013年より現職。

学生時代にNGOに所属し、アフリカの教育現場でボランティアを行った中村さん。そこで感じたのは、その土地に根付く仕組みを残す難しさ。それを胸に刻みながら、JICAだからこそできる協力を実現させたいと、日々業務に励んでいる。

肌身で感じる国際協力を 模索した学生時代

中学1年生の時、テレビでマザーテレサのドキュメンタリー映画を見ました。インドの路上でひっそりと命を終え、気にも留められない人たち。彼らを救うために、生涯をささげた一人の女性。初めて知った現実に衝撃を受け、涙が止まりませんでした。彼女のように、人の役に立つ生き方をしたい。それが、国際協力に興味を持ったきっかけでした。

国際協力に関する仕事に就くための知識を身に付けようと、大学では開発学を学びました。しかし次第に、「現地に行き、人々が何を求めているのか、自分に何ができるかを考えたい」という思いが強くなり、2年間の休学を決意。イギリスのNGOのボランティアとして、アフリカのモザンビークの教員養成学校で英語や社会を教えました。

大変ながらもやりがいを感じながら活動する中、ある時、隣国のマラウイのエイズ検査センターで活動していた同僚から「NGOの支援が打ち切られた後、センターを継ぐ人は誰もいなくなり閉鎖してしまっただ」という話を聞きました。そこであらためて、開発途上国で何よりも大切なのは、現地の人たちの手で運営できるような仕組みだと痛感。現地政府と話をしながら、その国の将来の姿を共に描いていけるJICAこそが自分が進みたい道だと気付いたのです。

教育分野における 日本の役割や意義を実感

現在は人間開発部で、教育分野の協力を担当しています。その一つが識字教育です。全ての人たちが読み書きができるようになり、生きていくための力を生み出したい。その一心で業務に取り組んでいます。現場では予期せぬことがたくさん起こります。

アフガニスタンでは2013年に国内の治安が悪化し、日本人専門家が現地に入るこができない期間が続きました。ちょうど全国の識字局の行政官を対象にした研修が始まるうとしていた時。3年以上かけて作成してきた研修マニュアルが紙くずになることだけは避けたい。専門家の切なる思いを受けて必死に対策を考え、スカイプを活用して研修を企画し、実施することができました。

また、パキスタンの協力を携わっている日本人専門家と協力して、これまでの取り組みの成果を日本の人たちに伝え、意見交換を行うセミナーを企画しました。日本でもマララ・ユスフザイさんのノーベル平和賞が話題となったことから、マララさんと同世代の人たちにも参加してもらいたいと思いい、学生を対象にしたワークショップも提案。子どもや女性が学校に行けない理由やその解決策を話し合ってもらい、「育児にも教育が重要だと知ってもらおう」「通信教育



アフガニスタンの特別支援教育についての会議に出席(前列左から2人目)。現地の渡航制限によりアラブ首長国連邦で開催された

を地域で運営する」などさまざまな意見が出されました。このような発信も私たちの大切な役割だと実感しました。

NGO時代に持続可能な仕組みを残す難しさを知ったからこそ、JICAだからできることを大切にしたいと思っています。相手の自立や自主性を考えながら、最終的には「自分の力でやっていけるからもう支援は必要ない」と言われるような仕事をするのが理想です。学校現場への支援だけでなく、国の政策のかじを取る人づくりにも力を入れていきたいです。

教育分野の支援は、その先の人生を切り開きつかけとなることに、とても魅力を感じています。一人でも多くの人が教育を受けられる社会を目指して、これからも努力していきたいです。



パレスチナで理数科教育の質の向上を目指し、プロジェクトを立ち上げるための協議に参加する中村さん(右手前)

ミャンマーのさらなる成長を後押し

01



ロイコー総合病院の着工式典で杭打ちを行う田中理事長（奥）とカヤー州のキーン・マウン・ウー知事



経済の中心地、ヤンゴンの街並み。近年の成長は著しく、多くの日本企業が進出に関心を示している（撮影：谷本美加）

2月6日から11日にかけて、JICAの田中明彦理事長がミャンマーを訪問し、両国の関係のさらなる発展を目指して、テイン・セイン大統領やアウン・サン・スーチー国民民主連盟議長らと会談しました。大統領は、各分野における日本の協力について感謝の言葉を述べるとともに、経済特区の整備に向けた日本の役割の重要性を強調しました。これに対し田中理事長は、ミャンマーの重要課題である地方開発、インフラ整備、人材育成・制度構築などに対するJICAの協力やその進捗を伝えました。

2月7日に開催された第3回ミャンマー開発協力フォーラムでは、田中理事長が基調講演を行いました。講演では、ミャンマーのこれまでの取り組みを評価した上で、社会・政治・経済がより一層、包摂的な構造へ転換するために、長期的な取り組みが必要である点を指摘。そのためにJICAは、「国民の生活向上」「人材の能力向上」「持続的経済成長のためのインフラや制度の整備」を柱とした支援を続けていくことを説明しました。

9日には、少数民族地域であるカヤー州で行われた「ロイコー総合病院設備計画」の着工式典に出席しました。同病院は1950年代に開設された州で唯一の総合病院で老朽化が著しいことから、JICAは無償資金協力を通じて、新しい病院棟の建設、X線診断装置や救急車などの医療設備の支援を行うことになりました。

また、保健医療従事者の能力強化を図る技術協力も実施する予定です。田中理事長は、ハードとソフトの両面から支援を行い、全ての人が負担可能な費用で保健医療サービスを受けられる「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ」の実現に向け協力していくことを強調。これに対し、カヤー州のキーン・マウン・ウー知事からは、JICAが同州内で実施する協力に対する感謝が述べられました。

東日本大震災から4年—仙台で防災を考える

02



JICAの田中明彦理事長がパネリストとして参加した国際シンポジウム

3月14日から5日間、世界各国の防災関係者が一堂に会し、防災戦略を議論する「第3回国連防災世界会議」が宮城県仙台市で開催されました。開幕の前にJICA主催で行われた国際シンポジウムでは田中明彦理事長が基調講演を行い、あらゆる開発政策や計画に防災の視点を導入する、防災の主流化の重要性を訴えました。各国の首脳や国際機関の代表も続いて登壇し、防災における中央政府の役割や、事前投資の必要性について議論を交わしました。

また、17日に「防災と人間の安全保障」をテーマに行われたパブリック・フォーラムでは、田中理事長が「防災への取り組みでは、必然的に人間的・社会的要素に配慮することが求められる」と述べ、JICAも包摂的で人々を中心に据えた取り組みを進め、被災地が再び自然災害にさらされないよう配慮してきたことを強調しました。

エッセイを通じて、国際協力の未来を考える

03



高校生の部を代表して受賞の言葉を述べる増田さん

2月28日、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2014」の表彰式が東京・市ヶ谷で行われました。このコンテストは全国の中学・高校生に開発途上国の現状と国際協力について理解を深めてもらうことが目的。今回は「つながりに私がしたいこと」をテーマに、中学生の部に3万7669点、高校生の部に2万8793点の作品が寄せられました。

表彰式では、最優秀賞を受賞した高橋裕さん（宮城県・岩沼中学校）と、増田愛理さん（東京都・雪谷高等学校）が代表であいさつ。アメリカで教わった「ベイ・フォワード」という言葉についてつづつた高橋さんは、「善意の山が世界を動かすかもしれない」と訴えました。また増田さんは、歩行を補助する装具をカンボジアに送る活動を行ったことで、「世界とのつながりを身近に感じた」と語りました。

世界をまるごと 体感する旅



アフリカの大地を自転車で
駆け抜けた。道中には、多
くの出会いがあふれていた
(モロッコ)

<Profile>

やなか・しゅうご
1978年静岡県出身。東京大学大学院
工学系研究科修了。外資・戦略コンサル
ティング会社を経て、新規ビジネス立
ち上げの専門家として起業。国際教育
NGO「Learning Across Borders」共
同ディレクターを兼務。ビジネス・ブレイク
スルー (BBT) 大学教員、ラジオDJ /
MCとしても活躍。

2009年、単身で世界一周の旅をした。毎日
が地球を巡る大冒険。3カ月弱で15カ国、最高に
エキサイティングだった。

「旅の目的は何だったのか」と、よく聞かれる。
答えはシンプルだ。ただ、地球を一周したかった
から。地球儀を回して眺めるだけで、こんなにも
たくさん国がある。そんな世界を全身で体感し
たい。その衝動こそが、旅の出発点だった。

当時、私はコンサルティング会社に在職中だっ
たが、自分の思いに従って動き始めると、不思議
と全てのタイミングがそろった。宇宙には、そう
いう力学が働いているのだろう。自分の仕事を回
しながら、世界一周が実現した。

日本から西回り。東南アジア、中東、アフリカ、
ヨーロッパ、北米、中米、大洋州と地球をグルッ
と一周した。毎日、気の赴くままに行き先を決め、
新しい町で、新しい人に出会い、新しい価値観を
体感した。イスラエルでは聖地エルサレムを巡礼
した後、兵士と共にバスに乗って死海にたどり着

自然と足を運びたくなるものだ。そして、思い切っ
て意中の国に足を運べば、現地の魅力と共に自ずと
課題も見えてくる。その実体験こそ、世界の問題を
理解するよりどころになると思う。

実は、そんな体感的な学びの機会にフォーカスし
た国際教育活動を、15年にわたって続けている。活
動の母体は、スタンフォード大学出身の教育者ドワ
イト・クラーク氏が設立した国際教育NGO「Le
-arning Across Borders」。私は共同ディレクター
として、日本の大学生を対象に、タイ、マレーシア、
シンガポール、ミャンマーに引率するスタディーブ
ログラムを企画・運営している。大切に行っているの
は、「Learning by Experience」。国際機関やNG
Oを訪ねたり、ファームステイをしたり、社会問題
の現場に足を運んだりする。そのインパクトは絶大
で、数週間で参加メンバーの意識が大きく変わって
いくのがリアルに分かる。

世界といかにつながるか。その方法は多種多様だ。
しかしどんなに技術が進歩しても、生身の体で現場
を体験することに勝るものはない。一度、異国に足
を踏み入れれば、そこには五感で味わう世界がある。
そして、人との出会いがある。その実体験があれば、
生涯にわたって、その国その街とのつながりは続く
ものだと強く思う。

百聞は一見にしかず。百見は一体験にしかず。だ
からこそ、ワクワクするテーマを入り口に、一度、
外へ飛び出してみるのには意味がある。そうすると、
あることに気付く。そう、世界は最高に面白いのだ
と。

き、湖上を漂流しながらキリストに思いをはせた。
タンザニアではランドクルーザーをチャーターして
マサイ族の村を訪ね、セレンゲティ国立公園でヌー
の群と交流した。キューバでは、革命家チェ・ゲ
バラの名のもとにシガーとモヒートで乾杯し、味わ
い深いクラシックカーに囲まれながらカリブの歴史
をしのんだ。

自分のワクワク感に身を任せてその土地に入っ
ていくと、面白いことに、出会った人々から芋づる式
にリアルな情報が入ってきた。本や雑誌では決して
知り得ることのない現地の魅力、美しく見える街の
背後に潜む根深い社会問題。それらは全て、世界の
ニュースを「自分ごと」として考えるトリガーにな
った。今でも中東のニュースを目にすればイスラエ
ルでの経験が思い出されるし、アフリカの記事を見
れば、タンザニアでの経験とひも付けて考える。知
っていることと実際に体験することの差は、そこに
如実に表れる。旅の経験は、かけがえのない世界と
のつながりを与えてくれた。

今あらためて世界各地に目を向けると、日々、さ
まざまな問題が起こっている。それらにきちんと目
を向けて、理解しようとする姿勢はとても大切だ。
ただ、そうは言っても、最初から「問題、問題：」
とストイックに教科書的なアプローチをするのも無
理がある。それよりも、自分がワクワクするテーマ
から世界とつながるほうが、一気に身近な話になる。
世界のスポーツを見たい、世界の芸術に触れたい、
世界の食を堪能したい。そんなシンプルな衝動を
大切に、自分らしい入り口で世界につながれば、



「Learning Across Borders」のスタディープログラムで、日本の大学生
を引率してバンコク郊外の村にファームステイ (タイ)

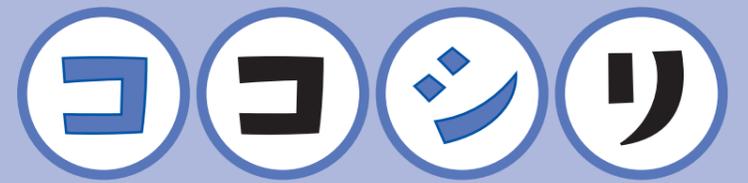


野生の動物たちが群がる草原を、ランドクルーザーで一気駆け抜けた
(タンザニア)



マサイ族の村を訪ねると、村長の家族が出迎えてくれた (タンザニア)

ビジネススクリエイター /
国際教育NGO主宰
谷中修吾



「ココが知りたい」。国際協力に関係する
いろんなトピックを分かりやすく解説します!



表紙写真: マラウイで活動する青年海外協力隊員 (撮影: 今村健志朗)

ODA政策

「2014年版政府開発援助 (ODA) 白書」

60年の歩みを 次の成長へ

日本政府が3月に公表した「2014年版政府開発援助 (ODA) 白書」。2014年に60周年を迎えたODAの道筋とは。

〈目次(一部抜粋)〉

第 I 部 ODA60周年—日本のODAの成果とこれからの方向性

- 第 1 章 日本のODA が築いてきたもの
 - 第 1 節 日本のODA の軌跡
 - 第 2 節 60年でなし得たこと—日本のODA の成果
- 第 2 章 これからの日本の開発協力

第 II 部 2013年度の政府開発援助実績

- 第 1 章 実績から見た日本の政府開発援助
- 第 2 章 日本の政府開発援助の具体的取組
 - 第 1 節 課題別の取組
 - 第 2 節 地域別の取組
 - 第 3 節 援助実施の原則の運用
 - 第 4 節 開発協力政策の立案および実施における取組

第 III 部 資料編

毎 年、前年度を中心とした政府開発援助 (ODA) の実績や今後の展望などを外務省が取りまとめている年次報告書「政府開発援助 (ODA) 白書」が公表された。今回は、2014年に60周年を迎えたODAの成果を振り返った上で、今後の日本の開発協力の方向性を説明する内容となっている。

最初に年代ごとに、ODAの役割や課題、それを取り巻く国際情勢の変化などを紹介。ODAは日本の経済成長に伴い量的に拡大し、さらにグローバル化の進展により開発課題が多様化するようになったことで、求められる役割が変化していったという歴史が記されています。また日本がリーダーシップを発揮した具体例として、保健医療、防災をはじめ、アフリカ開発会議 (TICAD) に代表されるような地域別の取り組みなどが挙げられています。

また、今年2月に閣議決定された新しい「開発協力大綱」も紹介されています。小島しよ国のように所得水準だけでは計れない、特別なぜい弱性を持つ国への支援を含め、質の高い成長とそれを通じた貧困削減や、地球規模課題への取り組みを通じた持続可能で強じんな国際環境の構築などを重点課題として掲げ、「国際社会の取り組みをリードし、日本を含む国際社会の平和と繁栄をより確かなものにしていく役割を果たしていく」としています。



フィリピンで、小児呼吸感染症の実態調査のため家庭訪問をする現地の看護師と玉記雷太専門家 (写真: 谷本美加)



モザンビークの首都マプト近郊のマングローブ園で、現地スタッフと樹高計測結果を確認する森林管理能力強化アドバイザーの井上泰子さん (写真: 永武ひかる)



国連世界食糧計画 (WFP) タンザニア事務所働く唐須史嗣さん (右端)



東ティモールで開かれた国連開発計画 (UNDP) 平和構築事業の会議に出席する横山雅子さん (右から2人目)

国 連などの国際機関で働きたい。そんな夢を抱く優秀な日本の若者を対象に、外務省・国際機関人事センターは、「ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー (JPO) 派遣制度」を実施しています。JPO派遣制度は、将来的に国際機関の正規職員として勤務することを志望する日本人を対象に、日本政府が派遣に必要な経費 (給与・手当など) を負担するというもの。原則2年間、各機関で職員として勤務することで、必要な経験を積みながら人脈を形成し、最終的に正規職員としての採用を目指します。

募集期間は、4月1日から5月7日

「JPO派遣制度」 世界を舞台に 働きたい若者にチャンス!

まで。応募資格は35歳以下 (2015年4月1日現在) で、外務省が派遣取り決めで結んでいる国際機関の業務に関連する分野の修士号を取得、または2015年9月末までに取得見込みであること。また、修士号取得分野に関連する職種において、2015年9月末までに2年以上の職務経験 (アルバイト・インターンを含まない) が必要で、英語で職務遂行が可能であることが条件です。派遣取り決めに結んでいる国際機関は30以上。興味のある人は、外務省・国際機関人事センターのホームページ (www.mofa-ic.go.jp/jpo/boshu.html) で情報をチェックしてみてください。

Message from Cambodia 青年海外協力隊、50年の歴史



協力隊員の中村さんとの思い出を語るトンさん (2014年10月撮影)



1960年代のナショナルチームの選手たちと中村さん (前列中央) とトンさん (右端)

JICAカンボジア事務所 — 木村文 広報アドバイザー —
青 年海外協力隊の派遣が始まって50年。カンボジアは、日本で初めて青年海外協力隊員を派遣した国の一つで、これまで600人を超えるJICAボランティアが活動してきました。今回はその中から、初代派遣隊員としてカンボジアで水泳指導に取り組んだ中村昌彦さんと教え子のヘム・トンさんをご紹介します。中村さんがカンボジアに降り立ったのは1966年1月。まだ内戦前で、首都プノンペンには東南アジアのパリとも呼ばれた美しい街でした。「とにかく厳しい指導者でした。当時水泳のナショナルチームの選手だったトンさんは、中村さんの指導

ぶりをこう振り返ります。練習中にもかかわらず、トンさんは69歳で亡くなり、トンさんも今回の取材を受けて間もなく、今年1月に72歳で亡くなりました。こうした協力隊員の軌跡は開発途上国の人々と、共に生きるという原点を教えてください。

現地からのメッセージは、ODAメールマガジン (www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/) でご覧いただけます。

Rwanda

[ルワンダ]

写真・文＝下村靖樹(ジャーナリスト)

未来をつなぐ 家族写真



ルワンダの首都キガリで出会った少女コロンベ(右)。戦災孤児である彼女は、幼なじみのガボといつも一緒にいた(2000年)



おぼろ豆腐を作るマドレーヌ。おからをクッキーにしたり、豆乳を食している人たちに配給していた(1998年)

ルワンダでの取材を始めて20年。そのうちの17年、ある一人の少女の成長を撮影し続けている。名前はコロンベ。乳飲み子の時、母親に捨てられた被災孤児だ。1990年代、ルワンダ内戦の取材を通じて、人間の持つ狂気の深淵をまざまざと見せつけられ、全てに絶望しかけていた私に、希望の道を示してくれた恩人でもある。

女性に堕胎こそしなかったものの、ジェノサイドと暴行による心の傷はあまりにも大きく、乳幼児の遺棄が相次いだ。コロンベもその悲劇から生まれた一人だった。出会いは98年。首都キガリの中心部にある「TOFU」という名の豆腐屋を取材していた時だった。オーナーは、ルワンダ女性マドレーヌ(当時33歳)。留学先のカナダで豆腐に出会った彼女は、その栄養価の高さに加え、製造過程で生まれるおからや豆乳も食料不足に有効活用できると感じた。内戦終結直後に帰国して「TOFU」を開き、飢えに苦しむ人々を助けてきた。



キガリの中心部にあった工業地帯。機械の部品などが売られていたが、今はもうなくなってしまった(1996年)



コロンベを抱き上げるマドレーヌは、まるで本当の母親のようだった(1998年)



豆腐が買えるようになったと、当時現地の日本人に話題になったTOFU。日本の豆腐よりは少し硬かったが、多くの人に喜ばれた(1998年)

タンザニア国境付近。内戦後、ルワンダに帰還する難民たちであふれていた(1995年)



コロンベとの最初の出会。TOFUの従業員の家族にもかわいがられていた(1998年)



a

a.内戦終結から10年の節目に建てられた虐殺記念館。内戦を経験した語り部が、その歴史を語り継いでいる(2004年)
b.マドレーヌとコロンベ。1998年に撮影した時と同じショットで(2005年)
c.私の影響を受けてか、カメラが大好きなコロンベ。近所の人たちを撮っては、「うまく撮れてる?」と見せてくる(2009年)



c



b



残虐な過去があったとは思えないほど、美しい光景が広がるキガリ。中産階級が暮らす新興住宅地がある(2010年)



すっかり大きくなったコロンベ(中央)。おしゃれが大好きな心優しい女性に育った(2014年)

「この子はね、私が郊外の村を訪問した帰り道、数枚の新聞紙にくるまれて孤児院の前に置かれていたの。今にも消え入りそうな弱々しい声で泣いていたから抱き上げると、ビタッと泣きやんで、私に笑いかけしてくれたのよ。その笑顔を見て、私は彼女を引き取ろうと決めたの」
見慣れぬ外国人の私を警戒したのか、そう話すマドレーヌの後ろに最初は隠れていたコロンベ。しかし、カメラを取り出し写真を撮り始めると、シャッター音に興味を引かれたのか、ヨチヨチ歩きで近付いてきた。レンズ越しに向けられる愛くるしい笑顔、曇りのない無垢な瞳。そこに私は、絶望の先に開かれる未来への可能性を感じた。誰からも祝福さ

れず生まれてきたこの少女が、やがて結婚して子どもを産むかもしれない。もしその子にこの少女が心からの愛情を注げたなら、憎しみと悲しみの連鎖が、一つ終わるのではないか。――
あれから17年。紆余曲折あったものの、コロンベは多くの愛情を受けてすくすくと育ち、いつの間にか私の背を追い抜き、最近髪にエクステンションを付け始めた。一歩一歩、大人の女性に近付いている。
世界中でただ一人、自分と血がつながった赤ん坊を愛おしそうに腕に抱き、最愛の男性と一緒に優しくほほ笑むコロンベ。そんな、始まりの一枚を撮るまで、私はルワンダに通い続ける。



コロンベ(左)と近所の子どもたち(2001年)



反抗期なのか、カメラを向けてもそっぽを向き、ほとんど口もきいてくれない時期もあった(2002年)

国民的な踊りといえば

ルワンダダンス



南部の都市ブタレの国立博物館で行われた記念行事でルワンダダンスを披露

独特のリズムを刻む音楽に、軽快なステップ。そして、はちきれんばかりの笑顔。この国で愛され続けている伝統的な踊り、その名はずばり、「ルワンダダンス」だ。

ルワンダダンスは、結婚式や式典などお祝いの場で披露される踊り。5～10人ほどが集まれば、ミュージックスタート!色鮮やかな衣装に身を包んだ男女が、太鼓と歌声に合わせて踊り始める。足首に付けた鈴が、ステップを踏むたびに、リンリンと音を響かせる。地域によって多少異なるが、牛の角や鳥の羽といった生き物を全身で表現するのが定番。男性は盾ややりを、女性はアガセチェと呼ばれる小さなカゴを持って踊る地域もある。

ルワンダでは、小学校に入った時からみんなこのダンスを教わる。体育の授業や放課後に練習を重ね、始業式や卒業式の舞台でその成果を発表する。難しく考える必要はない。ただ音楽に合わせて楽しく踊れば、今日からあなたもルワンダダンサーだ。



小学校でルワンダダンスを練習する子どもたち

地球ギャラリー

ルワンダの文化を知ろう!

ルワンダ料理といえば ビュッフェで定番のおかず

生野菜のケチャップあえ

お昼時、たくさんのサラリーマンでにぎわう街中のレストラン。店内の脇にあるテーブルの上には、ずらりと並んだおかずが。ルワンダでは、5～10種類の料理をワンプレートに盛り付けて食べる“ビュッフェ”スタイルのランチが定番だ。

中でもみんなが絶対に欠かさないおかずが、生野菜のケチャップあえ。千切りにしたタマネギ、キャベツ、ニンジン酢をよくもんでから、トマトケチャップであえるだけ。トマトケチャップを入れることで酢の酸味が和らぎ、マイルドな味わいに仕上がる。

また、ヤギ肉の炭火焼きやフライドポテトなども、どの店でも目にする人気のおかずだ。どちらもお好みで「ピリピリ」と呼ばれる香辛料をかけて食べるのがルワンダ流。塩と合わさって絶妙なおいしさになる。

ただ、ビュッフェスタイルのレストランに行く時には、一つだけ注意してほしいことがある。それは、日本と違ってほとんどの店が“おかわり禁止”ということ。みんな好きなおかずを一度に山ほど盛り付け、午後からの英気を養っている。



ルワンダではどのレストランにも置いてあるほど有名な「ピリピリ」



中央右が生野菜のケチャップあえ

[RECIPE]

●材料(2人前)

タマネギ2分の1個／キャベツ3枚／ニンジン2分の1個／酢適量／トマトケチャップ小さじ2～大さじ1(好みによって調整)

- ① タマネギ、キャベツ、ニンジンを千切りにする。タマネギは水につけた後で水気をよく切ったものを使う。
- ② ①を酢と一緒にビニール袋に入れ、よくもむ。
- ③ トマトケチャップであえ、うっすら赤みがかかったら出来上がり。塩やマヨネーズをかけてもおいしい。

イチオシ!

M OVIE

『グッド・ライ〜いちばん優しい嘘〜』

スーダンで1983年に始まった内戦から10数年後。内戦で親を亡くした3,600人の難民を全米各地に移住させるという大規模な計画が実施された。アメリカの職業紹介所で働く主人公の元に舞い込んできたのは、スーダンから移住してくる3人の男性を就職させるというミッション。電話を見るのも初めて、車に乗れば一瞬で酔ってしまう3人に最初は途方に暮れていた主人公だが、懸命に生きる彼らと真正面から向き合ううちに、思いがけない友情が芽生えていく。“ロストボーイズ”と呼ばれるスーダンの若者たちの実話を基にした感動の物語。



© 2014 Black Label Media, LLC. All Rights Reserved.

2014年／アメリカ／1時間50分

監督：フィリップ・ファラルドー

主演：リース・ウィザースプーン

公開：4月17日(金)よりTOHOシネマズ シャンテ(東京・日比谷)他、全国で公開

URL：www.goodlie.jp/

配給：キノフィルムズ

E VENT

『アフリカンフェスタ in ズーラシア』

アフリカの魅力がふんだんに詰まったイベントが横浜市で開催される。各国の伝統的な料理が勢ぞろいしたフードコートでは、お餅のような食感のフフ、プランテンと呼ばれる調理用バナナを使ったお菓子など、珍しい料理を味わうことができる。また、色鮮やかな布で作られた雑貨や民芸品を販売するバザールも開かれる。料理やビーズ作りが学べるワークショップや、民族衣装やヘアメイクの体験コーナーなど、アフリカ文化に触れることができる企画が盛りだくさんだ。

会期：4月11日(土)・12日(日) 5月2日(土)～6日(水)

9時半～16時半(入園は16時まで)

会場：よこはま動物園ズーラシア(横浜市)

問：アフリカヘリテイジコミティー

TEL：042-707-1900

URL：africazoorasia.web.fc2.com/

B OOK

『子どもたちにしあわせを運ぶチョコレート。世界から児童労働をなくす方法』

世界中の人たちに愛されているチョコレート。しかしその原料となるカカオは、学校に行かずに働く子どもたちによって作られている。そこでガーナのカカオ農園で働く子どもたちを救おうと、認定NPO法人ACEが取り組んでいるのが「スマイル・ガーナプロジェクト」。教育の大切さを伝え続けたことで、現地では次第に学校に通う子どもたちが増えていった。そして日本でも、学生や企業の間にある変化が一。カカオ生産の裏側にある児童労働の実態や、私たちができる国際協力の形について考えることができる一冊だ。



白木朋子 著
合同出版
1,512円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

B OOK

『カンボジアに村をつかった日本人 世界から注目される自然環境再生プロジェクト』

舞台は、カンボジア北部のシェムリアップ州にある約150人が暮らす地域。かつてはきめ細やかな^{カプリオリ}絨織が有名であったことから、地元では“伝統の森”と呼ばれてきた。しかし長年の内戦により、失われつつあった伝統。その可能性に目を付けた著者は、5ヘクタールの土地を購入。現地の若者たちと協力して荒地を開拓し、養蚕から染色まで、全ての作業が行えるよう“村”をつくり上げた。古きを重んじ、その復活に汗を流す人々の努力の軌跡がつつられている。



森本喜久男 著
白水社
2,052円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

「1月号特集「つないだ、つながった50年」を読んで」

■「高い志がない」のではなく、それがあるからこそ実現する自信が持てず、海外に出ることをためらってしまふのだと思う。でも、一度も失敗することなく成功する人はいない。そして失敗によって、その次にくる成功は何倍にも大きくなる。それは青年海外協力隊の50年を通して言えることだと思う。

(東京都／女性／37歳)

■青年海外協力隊としての任務の他に、ケニアの学生のための学費支援の仕組みをつくっている。その任務の枠から踏み出した発想と行動に感心する。

(岡山県／男性／72歳)

「2月号特集「動く、アフリカ」を読んで」

■フォトジャーナリスト、渋谷敦志さんの「学びの明かり」にあった「学びたいという意欲。これより他に意義のある投資先があるならば教えてほしい」という一節に非常に感銘を受けた。生活が厳しい中、いや厳しいからこそ学びたいと目を輝かすウガンダのサラに、明るい未来が照らされることを祈らずにはいられない。

(愛知県／男性／50歳)

■昨年の夏にケニアを旅行したこともあり、興味深く読むことができました。アフリカの若年層が増加するという面白い話題もある一方、公共衛生、産業の多様化など課題も多いことがよく分かりました。アフリカの人たちを日本に留学させて学ばせたり、技術を提供したり、日本ができることはまだまだあるなと思いました。

(愛知県／男性／32歳)

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2015年5月15日

Eメール：jica@idj.co.jp
FAX：03-3221-5584 (『mundi』編集部宛)

- ① グアテマラのカード
- ② 書籍『子どもたちにしあわせを運ぶチョコレート。世界から児童労働をなくす方法』(p37参照)
- ③ 書籍『カンボジアに村をつかった日本人 世界から注目される自然環境再生プロジェクト』(p37参照)



①



②



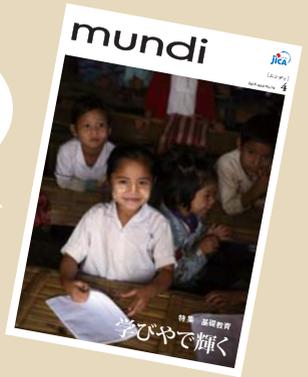
③

本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金の確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
TEL 03-3221-5583
FAX 03-3221-5584
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2015年5月1日発行予定)

中米・カリブ

日本人にとっては、ラテン音楽や踊りなどでなじみ深い中米・カリブの国々。その明るいイメージの裏側で、現地の人たちが直面する課題解決に対して、日本が取り組む国際協力を紹介します。



©Yuki Asada

マヤ文明のカードに思いをのせて

ある日の昼下がり、どこからともなく楽しそうな笑い声が聞こえてきた。その声に引き寄せられ、民家の一角をのぞいてみると、数人の女の子たちが集まって何やら作業している。手元には、真っ白な紙と色鮮やかな手織りの切れ地。「オリジナルのカードを作っているのよ」とびきりの笑顔で、そう教えてくれた。

ここは、マヤ文明が色濃く残る中米のグアテマラ。標高2,000メートルの農村部ソロラは、世界一美しいといわれる湖を望む山あいの街だ。美しく豊かな自然に囲まれ、日々食べていくには十分。でもまだまだ貧しい家庭も多く、小学校を卒業したら、家のお手伝いをして過ごす…。そんな女の子も少なくない。

みんなが夢を持ち続け、前向きに生きられるよう、何かできることはないだろうか。この地の子どもたちに教育支援を続けてきた白石光代さんが思い付いたのが、伝統衣装ウィピルを使った雑貨作り。その第一弾が、このカードだ。

カードの様子はさまざま。それぞれの形に合わせて型紙を作り、この地で代々受け継がれてきた織物を組み合わせ、切り張りしていく。「彼女たちのアイデンティティーであるウィピルを通じて、日本との懸け橋となるような商品が生み出せれば」。白石さんはそう期待する。

大切な人に贈るメッセージ。マヤの女性たちの思いがたっぷり詰まったカードで届けてみては。



カードの模様に合わせて型紙を作る。作業場はいつも笑顔であふれている

★カードを5人にプレゼント! → 詳細は38ページへ

★グアテマラのフェアトレードショップ「セミージャ」(semilla.ocnk.net/) で購入可能





私の なんとか しなきゃ!

Vol. 54

PROFILE

1973年ナイジェリア出身。大学卒業後、父親の仕事の手伝いで世界各地を回り、95年に初来日。2001年、「さんまのスーパーからくりTV」(TBS)をきっかけに芸能活動を開始。バラエティー番組をはじめ、ドラマやラジオにも出演。格闘家としても活動。「なんとかしなきゃ!プロジェクト」メンバー。

私が生まれたのは、ナイジェリア南西部の町。34人きょうだいの3番目で、朝起きると、水くみや掃除洗濯、弟妹の世話などで忙しい毎日でした。それをさぼると、とにかく父親にこっぴどく叱られましたね。決して裕福な生活ではありませんでしたが、みんなとにかく元気いっぱい。モノは限られているけれど、その中から幸せを見つけるのが得意でした。

学校には2時間歩いて行かなければならず、着くころには汗びっしょりになってしまいます。眠くなってしまい、正直に言うと、授業どころではありませんでした。もちろん水道なんてないので、学校にいる間は喉もカラカラ。でも不思議なことに、アフリカで暮らす人々には「脱水症状」なんてないんですよ。体が慣れてしまっているんでしょうね。友達と休み時間にサッカーをするのが一番好きでした。

父親はとにかく厳しかったのですが、仕事で行く海外の話をしてくれるのが楽しかったです。中でも一番興味を持ったのが日本。「海外に行くときたまされることも多いけど、日本人だけは信頼しろ」と言われて

アフリカと日本の懸け橋になりたい

タレント ボビー・オロゴン

Bobby Ologun



いました。大人になったら日本に行ってみよう。それが、私の夢になりました。

初めて来日したのは、22歳の時です。「父親の言っていたことは本当だった」と思いました。バスの中で落とし物をして戻ってきた時には、「ここは天国だ」と驚きました。貿易の仕事を手伝っていたのですが、日本人は何もかも完璧にこなしてくれる。言葉は全く分からなかったけれど、それでも何か通じるものがあり、信頼できました。「この国でなら、新しい自分を見つけられるかもしれない」。そう感じて、ここまで長く住むことになりました。

日本に来てから、アフリカを見つめ直すこともできました。時間にはルーズだし、約束も守らないけど、そこには「何もないところに輝くダイヤモンド」があるんです。サバンナに沈む太陽が地面すれすれまで降りてきて、それをモカコーヒーを飲みながらただ眺める。それだけで幸せなのです。「アフリカの水を飲んだ者はアフリカに戻る」。そんな言葉がありますが、嘘ではないと思います。

一方で、いまだ終わらない資源や権力を

めぐる争いのニュースを聞くたびに悲しくなります。昔のアフリカでは、近所の人たちとあるものを分け合って生きてきたはず。近年の経済成長も、一部の人が裕福になっているだけなのではないかと感じます。私たちは今一度、原点に戻らなければならない時にきていると思います。

少し残念なのが、日本の若い人たちは、世界地図に弱いことです。アフリカ、ましてや私の母国であるナイジェリアがどこにあるか、答えることができる人はほとんどいない。でもぜひ一度、思い切ってアフリカでもどこでも、外へ飛び出してみたい。それによって広がる世界が必ずあります。私ができるのは、アフリカと日本をつなぐこと。そのために、自分に何をすべきかを問い続けていきたいと思っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索